



「原」 “origin” H40×W180×D180cm 土 2015/3

序章

土には人を魅きつける魅力がある。それは過去から現代に至るまで、食器として、建材として、道具とし、様々なかたちで生活の中に存在していることから汲み取れる。本論では「形をつくる」という観点から土の持つ特性が人に与える魅力の根源を検証し、自身の修了制作に生かすことを目的とした。その際「変容」という言葉がキーワードで、自然界ではあまり起こる事のない焼成という現象に、焼き物における自然と人為との接点があるだろうと仮説した。焼成という人為的な

行為によって、土は自然を纏って焼き上がる。それが土の魅力とどうつながるのか論考した。

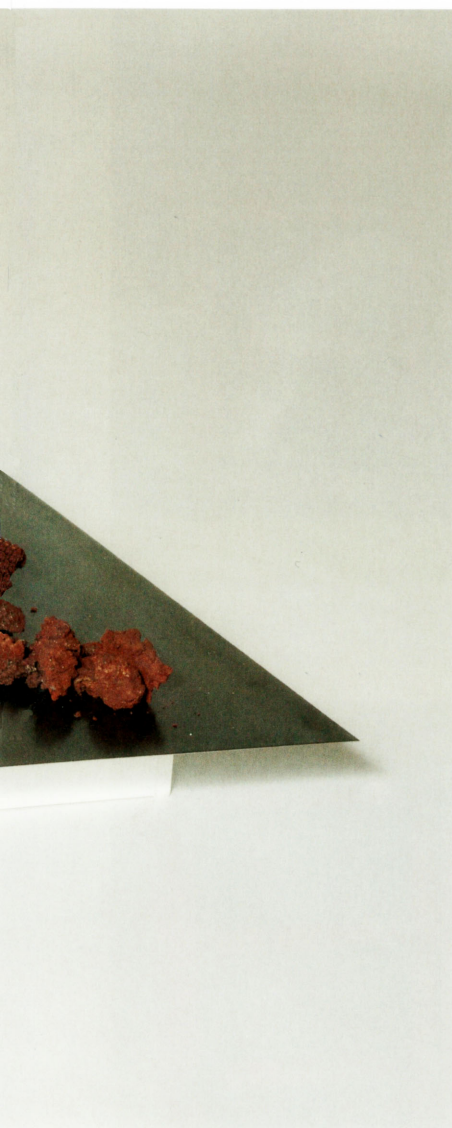
第一章 人の生活と土

土は人の生活と密接な関係を持っている。それは、土の持つ様々な特性が、人の暮らしに有益に働くことを人類が学び、活用してきたからだ。その中でも原始的な関わりとして、土偶としての活用・建材としての土の活用について触れ、なぜ土が使われたのかということを考察した。

土偶とは、人物や動物をかたどった土

製品である。エジプト、メソポタミア、中国など世界各地で古代より制作されていた。宗教的、呪術的な意味をもつ偶像として扱われ、日本国内でも多くの土偶が発掘されている。可塑性に富んでいるため自在に造形できること、焼成により丈夫で堅固に保存できること。これらの理由から土は像の素材として重宝され、非常に多く作られることとなった。

また土は焼成されずとも、生活に密接して使われることもある。その例として建材としての土を挙げ、本論では顕著な例としてアフリカのマリ共和国に着目し



た。マリには今でも土造建築が多く残っており、日干しレンガによって建物が作られている。その中でも、世界遺産にも登録されているジェンネの大モスクは年に一度町を上げて泥塗りを行っており、土と人との関わり方がとても象徴的である。人類は土の持つ特性を自分たちの生活にあわせて方向づけ、利用する事で暮らしてきたが、これは非常に有機的な関係である。焼いた土＝陶はそのままの状態と保存されるが、そのままの土は人が関わり続けることで寄り添い未来へと続くプロセスを辿ることができる。

このように土には様々な性質があり、焼いた土は堅固な物質へと変化し長い年月を過ごすことができるし、そのままの土は崩れては泥に戻り、また可塑性を得ることができる。どちらも人がおこなってきた形をつくる上での土との関わり方であるが、そこには焼成という明確な違いが存在する。ここでは焼成の人為性について述べ、その物質的变化の中で一体どういう点が土の優位性を保っているのか明確にした。

第二章 現代の陶作家

本章では、土のもつ特性に着目している作家4名を取り上げ、各々の土に対する姿勢について考察した。秋山陽は、「土の皮をむいた様な」独特の陶造形に特徴がある。バーナーで土をあぶり表面を急速乾燥させる手法は強引なようでいて、その状態変化の早さのために細やかな対応を求められる繊細な手順である。栗田宏一は土を展示会場に並べる「soil library」という作品を発表している。アーティスト・イン・レジデンスの作品では現地の土を集めて周り、その土の色別に分けて会場に設置することで本来土の持っている鮮やかな色を見事に作品化している。西田潤の絶シリーズはそのどれもが荒々しい躍動感に溢れているが、それは土と釉が混ざり合い一つの塊として作られているからである。このシステムの大きなポイントは、作りたい形が先行するのではなく、このように焼けた土を見せることが最優先されていることである。伊藤公象の仕事は、土という物質に本来内在している形・フォルムを導きだすことに終始されてきた。多軟面体シリーズの制作は、土を伸ばす事、そして丸めることというふたつの作業から成っているが、それに対し起土シリーズは、厳しい寒さの中凍結と解凍を繰り返す土が自然に見せるひび割れを主役に作られている。この4名の制作はいずれも作者より素材である土が先行している。土が本来もっている特性や形態を作家の視点で探し出し、作品の根幹と成していることを読み取る

ことができる。

第三章 修了制作「原」について

作品「原」の制作に至るまでの動機と過程、コンセプトについて述べた。

土は600℃を超え焼成することで陶へと変容する。自分の意思で形を作って制作することだけではなく、本来土が陶に変わる現象とは何かということを主軸に、単なる土を焼成することも焼きものの範疇ではないか、と仮定した。

そこで私は、修了制作「原」ではあえて精製されていない生の土そのものを焼くことで、焼き物に対する既成概念を揺さぶり、本来土を焼くということはどういった状態をさすのか、ストレートに鑑賞者に訴えることをコンセプトに制作した。

生の土を焼くこと数回、それぞれの土が見せる色や形、含有分による融点の違いで土が焼ける様子を提示した。これらは焼けば焼くほど増殖し、決まった形を持たないが、群体として存在することで存在感を得ることができる。自分たちが普段目にする土とは似て非なるもの＝陶であるというフィルターを通して見ることで、土自身の形態、形になろうとした痕跡を鑑賞者にも気づかせるきっかけを与えている。

終章

土はとても律儀である。こちらからの働きかけを一切無視せず応えてくれる。押せばへこむし壊れる。燃やせば縮んだり破裂したりする。しかし、人の行為がそのままの意志として土の形に痕跡を残すのではない。それは土が意志を持っているかのような反応である。その反応の区切りとなるのが焼成である。土の特性と作り手が関わった過程そのものが形になる。それは人の手を離れた変化で、劇的なものである。この一連の流れが土の持つ根源的な魅力であるとして、本論のまとめとした。